

I was born

確か 英語を習い始めて間もない頃だ。

或る夏の宵。父と一緒に寺の境内を歩いてゆくと、青い夕靄(ゆうもや)の奥から浮き出るように、白い女が一ちらくやってくる。物憂げに ゆっくりと。

女は身重らしかった。父に気兼ねしながらも僕は女の脇から目を離さなかつた。頭を下にした胎児の柔軟なうごめきを腹のあたりに連想し それがやがて 世に生まれ出ることの不思議に打たれていた。

女はゆき過ぎた。

少年の思いは突飛しやすい。その時、僕は「生まれる」ということがまさしく「受身」である訳をふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた
…やっぱり I was bornなんだね…

父は怪訝(けげん)そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。

… I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意思ではないんだね…
その時 どんな驚きで 父は息子の言葉を聞いたか。僕の表情が単に無邪気として父の目にうつり得たか。
それを察するには 僕はまだ余りに幼かった。僕にとつてはこの事は文法上の単純な発見に過ぎなかつたのだ
から。

父は無言で暫く歩いた後、思いがけない話をした。

…蜻蛉(かげろう)と言う虫はね。生まれてから一、二日で死ぬんだそうだが それなら一体 何の為に世の中へ出てくるのかと そんな事がひどく気になつた頃があつてね！

僕は父を見た。父は続けた。

友人にその話をしたら　或日　これが蜻蛉(かげろう)の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。説明によると口はまったく退化していて食物を摂(と)るに適しない。胃の臍(ふ)を開いても入っているのは空気ばかり。見るとその通りなんだ。ところが卵だけは腹の中にぎっしり充满していて　ほつそりとした胸の方にまで及んでいる。それはまるで　目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが　咽喉(のど)　もどまで　こみあげてるように見えるのだ。淋しい光の粒々だったね。私が友人の方を振り向いて、『卵』　というと　彼も肯いて答えた。『せつなげだね』。そんなことがあってから間もなくのことだったんだよ、お母さんがお前を生み落としてすぐ死なれたのは…。

父の話のそれからあとはもう覚えていない。ただひとつの痛みのように切なく僕の脳裡に灼きついたものだった。

…ほつそりとした母の 胸の方まで 息苦しくもさいでいた白い僕の肉体…。

開聞「岩が」「奈々子に」「虹の足」「I was born」から一編を選び、百字以内で感想書きなさい。